

気になる人を真ん中に 都市部における住民主体の 地域包括ケアの実践と効果の検証

鈴木 恵子 氏

ボランティアグループすずの会 代表



□□□□□

要旨

高齢者支援のボランティアグループ「すずの会」は、川崎市宮前区野川地区で、「気になる人を真ん中に」を合言葉に、21年の活動実績をもつ。本報告は、地域包括支援センター、行政、医療関係者、介護者の参加のもと、今、都市部で起きている典型的な11事例を取り上げ、住民の視点で医療・介護・福祉をつないで行った包括的ケアの実践と、地域活動の人的・経済的効果(インフォーマルコスト)の検証結果をしるしたものである。

ケアの実践から、都市部で抱える課題、すなわち地域とのつながりが薄く孤立しがち、家族との縁の薄さ、非婚化、単身世帯/独居の増加、認知症高齢者の増加、超高齢による経済破綻などが、浮き彫りになった。複雑な問題を解決するには、公的支援だけでは難しく、近隣の気遣いから発展した住民グループの柔軟な発想による活動が大きな支えとなっていることが示された。また11事例については、1か月、毎日の生活記録表を作成し、家族、ご近所/地域、すずの会の介護・支援活動の経済効果を初めて試算し、制度の隙間を埋める活動の効果を数値的に示すことができた。また、会全体の活動の経済効果や、活動を通して生まれる人的効果についても検証した。

これらによって、すべての住民が住民活動の意義・貢献度合いを再確認し、地域の公的資源と連携のもと、さらに今後の活動継続に注力する動機付けになることが期待される。

活動・結果の報告

1.11 事例の検証

都市部における高齢社会が抱える特徴的な課題を、11事例に関連づけてキーワード的に示す。

①息子介護・介護離職、②在宅医療の奇跡：療養型病院から在宅へ、③認知症の恐怖：日常生活が困難となった独居、④老後破産、⑤環境変化と認知症：独居から娘宅へ、⑥気になる人を真ん中に：介護保険利用を拒否する認知症独居を支える、⑦本人主役に付き合う：ゴミ屋敷で生きる、⑧職業婦人の老後、⑨うつ病患者のひとり暮らし、⑩認知症診断：ボランティアも高齢に、⑪高齢男性上手な一人暮らし。

11事例について、地域包括ケアの実践を検証した。

(1)地域ネットワークの力

11事例の高齢者の日常生活を支えたのは、すずの会がコーディネーターの役割を果たしながら、地域の専門職を巻き込む歯車となって、21年間育んできた地

域ネットワークの力である。地域住民(町内会、自治会、自主活動団体)、地域包括支援センター、社会福祉法人、行政、地区社協、民生委員、医療関係者などからなるネットワークである。このネットワークは地域内の問題を見逃さないで支えている。

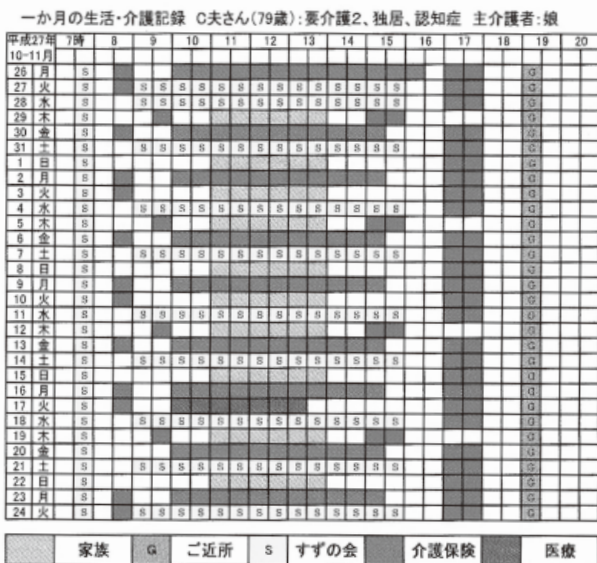
ここでは、事例③C夫さん：認知症独居の検証結果を示す。

数ヶ月の娘宅での同居で進んだ認知症。医師の勧めもあって、長年仕事をし、なじみのある地域に戻り、4年前に独居を再開した。しかし、ご近所が火事等を恐れることがきっかけとなり、この4年間、家族と連絡を取り合いながら、見守りや支援を強化した。迷子徘徊事件、認知力低下に伴う無駄な出費問題などにも地域の力で対応してきた。現在、家族の生活支援、ご近所の見守り、すずの会の月10回のミニデイサービス、8回の入浴、介護相談などと、介護保険利用のデイサービスやホームヘルプで、独居が続けられている。地域ネット

ワークによる包括的ケアの実践効果を明らかにすることができた。

(2)生活記録表の作成、経済効果の試算

すずの会が深く関わることで、1か月の生活・介護記録を図にすることが、初めて可能となった(下図)。家族、ご近所、すずの会が、介護保険制度による支援の隙間を埋めて、認知症独居者を何とか支えていることが一目でわかる。昼間は外部の目が必ず入るが、夜は一人。ご近所、すずの会は、早朝と夜中の見守りが欠かせない。



(試算年月)		平成 27 年 11 月
提供・利用総額 (月)	T	541,265 円
家族	1	82,566
ご近所/地域	2	76,394
すずの会	3	180,344
介護保険利用額	4	201,961
訪問医療利用額	5	0
提供・利用総額比		%
家族比率	1/T	15.3
ご近所/地域比率	2/T	14.1
すずの会比率	3/T	33.3
介護保険比率	4/T	37.3
訪問医療比率	5/T	0

生活記録表に基づき、1か月の家族、ご近所、すずの会などのインフォーマルな支援の経済効果、すなわち、支援を介護保険制度などを利用した場合の金額を試算したのが下表である。この事例では、すずの会が介護保険利用額と同程度の支援をし、家族とご近所とともに支えていることがわかる。隙間を埋めることのできる地域作り、その支えの重要性が数値的にも初めて示されたといえる。

提供・利用総額(T)や、各支援の提供・利用総額比は11事例で個別性がある。それは都市部で高齢者が抱える問題が多様であるためである。しかし、幾つかの特徴的な

傾向が見られることも明らかになった。

さらに、すずの会が1年間に行った主な支援活動について同様な試算を行い、経済効果を推計することができた。

2.ボランティアのアンケート調査

すずの会など、地域を支えるボランティア活動による人的効果を検証する目的で、調査を行った。

その結果から、資格を持つボランティアが増加していること、ボランティア自身が高齢者支援活動を通して、地域貢献ができることを実感し、地域の健康志向の意識を高め、自身も元気でいられることが明らかとなった。結果として活動自体が、介護予防事業の実践となっていて、ボランティアは逆に、要支援・要介護者から支援を受けているといえよう。

おわりに

住民力が育ち、強力な地域ネットワークを構築し、公的組織と地域組織がバランスのよい支援をすることによって、都市部の高齢社会が抱える様々な課題、問題に対しても、限界があるとはいえ、在宅を可能にできることを、本研究は明らかにした。ネットワークの構築には、良きコーディネーターの存在と年月が、そしてなによりも積み重ねの実践が必要である。

研究実施中、すずの会と同様にコーディネーターを中心に地域作りで実績のある新潟市の「実家の茶の間・紫竹」を訪ね、ボランティアの方々、さらに行政(県、市)と意見交換の研修も行った。

報告は、地域包括支援センターを含む地域のネットワークのメンバーが、50回以上集まり、150ページにまとめた。研究成果の詳細については別途出版されるので、ご拝読いただければ幸いです。